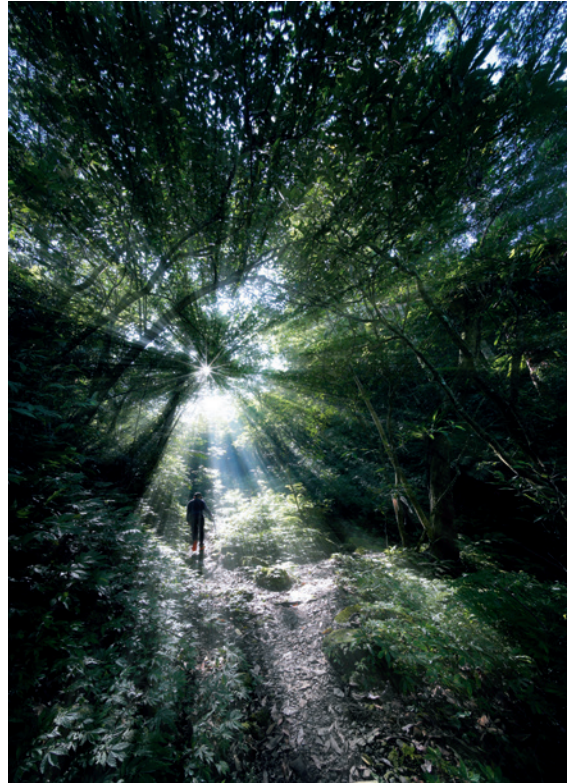


慈濟

ものがたり

安心して長く暮らせる新しい故郷
慈濟が建設を支援した台中市花東新村と自強新村の住宅が落成





衆生で福を分かち合う 天国も地獄も人間にある

● 扉の言葉 文・證嚴法師
訳・濟運 撮影・蕭耀華

人の力を微々たるものと軽視して、
僅かなお金と馬鹿にしてはいけません。

僅かな額も積み重ねれば、
無限に苦難にある人を助けることができます。

策と力を寄せ合わせれば、
愛で困難な道を平らにすることができます。

「一」から無量の福を生み、善の種子を蒔いて衆生を導くのです。
衆生は「共業」を造りますが、「共福」を造ることもできます。

天国も地獄も人間（じんかん）にあるのです。

表紙



921地震の後、被災した中部の原住民は2つの臨時集落である霧峰区の花東新村と、太平区の自強新村を作って生活を始めた。22年間の各方面の努力を経て、慈済は政府の要請により、元の場所に恒久住宅を再建した。今年春、落成して入居が始まり、住民は頑丈な新居に移った。(撮影・黄筱哲)



慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】

じんかん
人間で安心して住めるように

善耕／訳
4

【特別報道】

収まらない戦火・故郷を思うウクライナ難民

済運／訳
8

【表紙の物語】

終の住処に・新たな原住民集落となった再建

田中亞依／訳
22

【世界に目を向ける】

中国・四川、フィリピン・ケソン市

明陸
常樸／訳
44

【證嚴法師のお論し】

心が通じ合えば、
世に幸せがもたらされます

慈願／訳
50

【健康の玉手箱】

リサイクルステーションに来て 若返った

江愛寶／訳
57

【親と子と教師、三者の本音】

スマホ世代が
古典文学を好きになった時

江愛寶／訳
62

【国際慈善】

香港 コロナ禍の第五波

葉美娥／訳
66

急速にピークを更新

荒涼とした戦場 ホタルが淡い光を放つ

御山凜／訳
76

ミャンマー かつては船長・今はボランティア

惟明／訳
84

シンガポールの防疫

慈願／訳
92

配慮の力をプラス

【行脚の軌跡】

絶えず真理と向き合う

済運／訳
100

五月の出来事

済運／訳
106

じんかん 人間で安心して住めるように

三月初め、ウクライナとロシアの戦火に怯える中、多くのウクライナ人が追われるように故郷を逃れた。慈済は人道支援活動を展開し、初めは隣国ポーランドの国境地帯で緊急支援物資を提供した。戦火が一日でも早く治まり、彼らが安心して家に帰れるようにと願った。

人災と天災は常に人類の生存において厳しい試練となる。被災者には各方面からの支援が必要であり、それが数十年続くこともある。最近、台中市霧峰区花東新村と太平区自強新村では住民のための新築住宅が落成したが、このことはその一例である。

二つの村とも都市部から外れた原住民の部落で、殆どの住民は、花蓮から台東にかけて住んでいるアミ族である。一九九九年九月二十一日の大地震によって、彼らは居住と生活面で困窮に陥った。国有地に建てられた仮設住宅に住んでいたが、二十数年経っても再建できず、安全が憂慮された。台中市政府と慈済が協力して、二つの村の元の場所に、社会住宅を建設する精神でもって、恒久住宅の建設を支援することになった。

都市部の原住民部落は一九六〇年代から、台湾経済の成長に伴い、労働需要が増えた。そして、消費生活が部落社会の自給自足という経済モデルに影響を及ぼし、伝統的な生活では生計を立てることが困難になった。従って、原住民は次第に都市部に移住し、就業や就学の機会を求めるようになった。今では、都市部の原住民は全原住民人口の六割以上を占め、中でもアミ族が一番多い。

当時、彼らは経済面や教育面で取り残されて社会的に弱い立場にあり、大部分の原住民男性は鉱夫や建設労働者、遠洋漁業の乗組員などリスクの高い

職業に従事し、女性は紡績工場の従業員や美容師などの仕事をした。アミ族の多くは建設業で働いており、型枠職人を例にとると、原住民は台湾経済の発展にれっきとした貢献を残している。

都市では生活費が高いため、原住民にとって家の購入も賃貸も相対的に困難である。彼らは都市の外れの川縁に自分たちの集落を築き、助け合う形で肩を寄せ合って暮らしている。しかし、このような居住形態は公共安全にもリスクをもたらす。

今月号の表紙の物語によると、震災後、住民の生計は一層悪化していたが、器用な手で拾い集めた廃棄建材で、非常に短い時間で家を建てていた。

今、二つの村は、社会住宅を建設する精神で再建するには多方面からの考慮が必要で、即ち住宅の購入と賃貸市場とは別に、政府は基本的な居住の質を備えた一定数の住宅を確保しなければならないのである。経済的に立場の

弱い人でも手が届く範囲内で、「賃貸のみ」という方式を採用することにより、社会のセーフティネットを構築することができる。

台湾は十年ほど前からやっと、社会住宅を推し進めるようになった。都市空間が狭くなるという課題に直面してはいるものの、物件数を増やすことは困難でも、建築規格とコミュニティの構築においてはまだ弾力性がある。今回の二つの村の再建は、原住民の文化の伝承と社会福祉資源の注入も考慮に入っている。

慈済が建設を支援した恒久住宅の歴史は、一九六七年に遡る。茅葺小屋に独居していた目の見えない李阿抛爺さんのために建てた家が、最初である。その後は二〇〇九年に、台風八号（モーラコット）の被災者のため政府と協力して恒久住宅を建設した。初心を忘れず、十方からの愛を結集し、被災者が人間（じんかん）で安心して過ごせるよう願っている。（慈済月刊六六五期より）

収まらない戦火 故郷を思うウクライナ難民

ロシアとウクライナの戦争が始まって久しい。今年二月から第二次世界大戦以来ヨーロッパ最大規模の戦争である。ポーランドは最も多くのウクライナ難民を受け入れているが、そこには密度の高い愛がある。

「ウクライナが世界から消えることはない。……運命の神は再び微笑んでくれる……」。砲弾が炸裂する中、地下室や地下鉄構内に避難したウクライナ人たちは国歌を歌って、困難中にある

同郷の人たちと自国を守ってくれている軍人にエールを送った。

今年二月二十四日にロシア軍がウクライナに侵攻して以来、首都キーウと東部のドンパス地方、ルカンスク地方及び南

部の黒海沿岸の町が戦闘地区になった。ウクライナ軍は首都と大部分の国土を死守したものの、多くの都市や町、村が激しい戦火に見舞われた光景は全世界を震撼させた。

ポーランド東部ルブリン市の赤十字社が設置した収容所で、慈済ボランティアがウクライナ難民にプリペイドカードとエコ毛布を贈った。カードを使って、現地の特約スーパーで必要な物資を買うことができる。



何百万というウクライナの人が祖国を追われ、ポーランドやスロバキア、ハンガリー、ルーマニアなどに避難した。国連の統計によると、戦争が勃発してから四月十八日まで既に四百八十万人が国境を超えた。そのうち二百七十万人が隣国のポーランドに到着し、慈済もそこでウクライナ難民に対する第一線でのケアを始めた。

カードによる買い物 避難の旅を身軽に

「地の縁は愛であって良く、政治的な

ランド人たちによって行われた。

三月五日、ポーランド中部の都市ポツナンで行われた慈済の初めての配付活動は、かつて大愛テレビ局の記者で、今はポーランド在住の張淑兒(チャン・シューアル)さんとポーランド人の夫のルカス・バラノヴスキーさん、そして中国語に精通したポーランド人ボランティアが協力して行った。困難な中で第一歩を踏み出してから三月末まで、既に四回配付を行った。

「彼らは『希望の家』にまで行って物資を届けました。そこは元々、薬物依存症の治療センターでしたが、今は修道女

繋がりでなくて良いはず。私たちは地の縁を通じて、愛を必要としているところに届けます」。慈済基金会宗教処海外慈善部門の呂宗翰(リユー・ゾンハン)さんはこう説明した。イギリス、ドイツ、フランスの慈済人は、ロンドン、パリ、ミュンヘンからあらゆる在庫のエコ毛布とマフラーなどを、ドイツ北部の大都市であるハンブルグに集め、その後ポーランドに輸送して難民に配付した。しかし、ポーランドには慈済の連絡拠点がなく、認証を受けたボランティアもいないため、三月の一回目の配付活動は、台湾からの移住者や留学生及び熱心なポー

たちが部屋を難民に開放して自分たちは地下室に移ったとのことで、とても感動しました」と呂さんが言った。

西部の都市シュシェンでは、イギリス慈済ボランティアが知り合ったポーランド人ボランティアのマルゴザータさんが、シュシェン大学に設置された難民避難所を視察すると共に、慈済を代表して千二百六十枚の寝袋と日用品を贈った。次は三千人以上の生活物資を配付する予定である。首都ワルシャワでは、現地に住んでいる華僑が他の団体と協力して、各地の避難所と連絡を取ったり、訪れたりして、首都に在るウクライナ難

ウクライナ難民支援で 慈済がポーランドで物資を配付

地点と品目：

シュシェチン市：

寝袋1260枚、エコ毛布100枚及び日用品

ポツナン市：

寝袋200枚、食糧パック440個及び日用品

ルブリン市：

プリペイドカード451枚、寝袋1500枚、
エコ毛布237枚

配付対象：延べ3919人

(2022年4月13日現在の統計によるもの)



民が必要としている物事を聞き取っている。

それと同時に、東部の大都市ルブリンでは慈済大学を卒業した台湾人留学生のジョーイ・チェンさんが奔走して現地政府や赤十字社、カリタス基金会と積極的に連絡を取り、これからの比較的大規模な配付活動に備えた。四大都市で行われた準備作業で、ウクライナ難民は初めて慈済のケアに接したことから、ボランティアたちに難民の置かれている境遇と何をしてほしいかを知ってもらった。

ポーランド各地の難民登録所では、難民受け入れセンターが先ず、食糧や安全な医療、避難所の情報などを提供し、その後、臨時の滞在先を紹介する方式を採っていた。しかし、難民がどんどん増えるにつれ、多くの滞在先で物資が不足するようになり、長く留まることができなくなっている。

「難民は荷物を持って東側の国境から入って来るため、十キロや二十キロもの物資を配付すると、歩くこともできません。現地ボランティアが台湾本部の職員と相談した結果、

毛布と寝袋、プリペイドカードを提供することにしました」。呂さんによると、このカードは特約店で必要な物資を買うことができ、この支援方式は台湾や多くの国で行われてきて、好評を得ているのだ。

しかし、ポーランドでは、慈済のこのカードの配付準備段階で紆余曲折があつ

ポツナン市にあるカトリック教会の「希望の家」は、精一杯ウクライナ難民を受け入れているが、物資が不足している。張淑兒さん夫婦は現地の自転車メーカーのオーナーや医師たち5人のボランティアと共に、直ちに食糧と日用品を届けた。

善の縁は四方からやって来て、交流する人や団体が多ければ多いほど、慈済は次第にポーランドでウクライナ難民を支援する際の重点が分かるようになった。台湾では清明節の連休中だった、四月二日と三日に、ボランティアたちはルブリン市で四回、物資とプリペイドカードの配付を行った。前三回はそれぞれルブリン医学大学の模擬センターと難民収容宿舎、赤十字社避難所で行われ、四回目の配付

た。現地でカード用のプラスチックが酷く不足していたのだ。ボランティアは協力関係を結んだチェーンストアと相談し、先方から一万五千枚のカードを提供してもらおうよう依頼した。幸いに最後に当たったメーカーに十分な在庫があり、慈済のロゴを入れた後、難民が使用できるものとして配付できるようになった。



はカリタス基金会と共同で行われた。

言語を超えて、

相手の苦痛を我がものと感ずる

配付活動を円滑にするため、ドイツボランティアの陳樹微(チェン・シューウェイ)さんと、シリア生まれでオランダの慈済ボランティアのハデイさんは、わざわざミュンヘンから車で十二時間かけてルブリンに行き、ジョーイ・チェンさんと共にルブリン医科大学の教師や学生ボランティアを集めて活動を行なった。

国際災害支援経験が豊富で、何度もセ

カードの試験的な配付を円満に終えるために、陳さんとルブリン医学大学のボランティアたちは睡眠を取る時間もないほど忙しかった。教師と学生たちはとても熱心で、特にウクライナ人の学生の態度が陳さんの心を動かした。

「私は彼らに、慈済は『被災者雇用による復興』方式で皆さんを支援する、と説明したのですが、学生たちは逆に、『支援に来てくれた方からの報酬は受け取れません』と言ったのです。学生たちはまだ正式にお金を稼いでいるわけではなかった上に、非常に遠くから車で来た人もいたので、私はやはり工賃を支払いま

ルビア共和国に出向いて難民支援をして来た陳さんはこう言った。「戦争は突発的に起きるものですが、ポーランドのNGOの多くは大量の難民に対応した経験がなく、協力相手となった慈済がプリペイドカードを配付すると聞いて、とても驚いていました。彼らは、それは難しいだろうと言い、また、どうやって配付対象者のリストを作るのが問題だと言いました」。

今だに雪が降りしきるルブリンで、立て続けに市政府との連絡、難民収容所の視察、人手の募集、資料の整理などをこなし、一回目の五百枚のプリペイドした」。

経験豊富な慈済人と青年ボランティア、そして協力団体の努力で、やっとカードと毛布の配付が行われることになった。四月二日の配付会場で英語版の「祈り」という曲を流したところ、ウクライナ人のお婆さんが合掌したり、ウクライナの伝統的な手つきで祈ったりする人もいた。多くの母親は涙を流したが、子供たちは何が起きたのか分からず、遊び続けていた。

陳さんと台湾留學生は臨時に覚えたウクライナ語で挨拶していたが、支援を受けた人たちは彼らに同胞のような親しみ



を感じ、皆で記念写真を撮った。中には居住している区域に陳さんを招いて、彼女には分からないウクライナ語で、心の悩みを打ち明ける人もいた。

「彼らは皆、子供を連れた女性や高齢の男性たちで、精神面で彼らを気遣うことがとても必要だと感じました」。

ヨーロッパの慈済ボランティアは、ポーランドの第一線で人々の力を結集し

ドイツとオランダの慈済ボランティアがルブリン市にやって来た。現地の台湾やウクライナからの留学生、現地ボランティアと合流し、協力し合って慈済がポーランドで初めて行ったブリペイドカードの配付活動を順調にやり遂げた。

(写真提供・張淑兒)

てケア活動を展開した。また、ポーランドやウクライナから八千キロも離れた台湾でも、「苦を見て福を知った」慈済ボランティアたちが、政府外交部で「民間から愛の物資を募り、ウクライナ難民を支援する」活動を支援し、愛を携えた台湾の大衆のために奉仕した。

蓄積された経験で

台湾の愛を梱包する

「その時は三月九日の午後で、外交部で物資を募って二日経っていましたが、

予期した以上に数量が多かったため、慈済に支援を求めてきました。それは慈済ボランティアの豊富な国際災害支援での物資の梱包経験を活かして協力してくれることに期待したのです」。台湾での連絡責任者である北部のボランティア呉英美（ウー・インメイ）さんが、今回の大変な任務に携わったきっかけを説明してくれた。

広い外交部の地下駐車場は人の声が湧きたち、あちこちで箱を開封したり、テープを貼ったりしていた。「避難途中で風邪をひいたり、怪我をして感染した

り、胃腸を悪くした時は抗生物質が必要
です」と北部慈済人医会の薬剤師ボラン
ティアである蘇芳霽（スー・ファンペイ）
さんが、薬の数量をチェックしながら、
説明してくれた。

外交部が募った物資は二十種類に上
り、医薬品だけで十四種類もあった。大
衆は積極的に寄付したが、箱の中には
様々な品目のものが入っているため、一
つずつ確認する必要があった。ボラン
ティアチームは毎日、梱包を手伝い、少
なくとも千箱余り、多い時は三千箱余り
に上ったため、煩雑な重労働で高齢のボ

買ってきたそうで、私はそれを聞いてと
ても感動しました」と、曾さんがその人
を賞賛した。

祖国と肉親が気にかかっていたウクラ
イナ人の鄭サーシャさんは、焦りと悲し
みの中で、慈済ボランティアの友人に付
き添われて梱包作業をしていた。活動が
終わった後、彼女は静思精舎を訪れ、慈
済人に感謝した。「私は四カ国語ができ
るのですが、『余りあるほど感謝してい
ます』という言葉を的確に表現する言葉
が見つかりません」と言った。

慈済ボランティアが三月十一日に始め

ランティアは手足の痛みを訴えたが、翌
日には同じように精一杯努力し続けた。
新北市三峽区に住んでいる曾秋香（ゾン・
チウシアン）さんは、三日続けてバスと
地下鉄（台北 MRT）を乗り継いで通つ
た。ボランティアたちは歳に負けない奉
仕を続け、大衆からの絶えない愛がお祖
母さん世代の彼女を励ました。

「ある日、地下鉄台湾大学病院前駅の
一番出口で、一人の妊婦が買い物キャ
リーを引っ張りながら私に、外交部の地
下駐車場はどこかと尋ねました。彼女は
寄付するために発熱インナーを選んで

た外交部での物資の整理作業は三月二十
日に終わった。延べ二千四百四十八人が投
入し、二万四百箱余りを梱包し、総重量
は二百トンに達した。台湾人の思いやり
は、迅速に、それを必要としているウク
ライナ人に届けられた。

戦況は依然として見通しが立たない
中、海外会務の責任者である慈済基金会
の熊士民副執行長は、慈済は国連児童基
金会（UNICEF）と契約を交わし、
共同で女性や子供の多いウクライナ難民
に多様な支援を提供していくことにした
と語った。（慈済月刊六六六期より）

「表紙の物語」

終の住処に 新たな原住民集落となった再建

慈済が建設支援を行った、台中市山間部の花東新村と
自強新村で入居開始

文・葉子豪 撮影・黄筱哲 訳・田中亚依

市政府と慈済の協力により再建された台中市太平区の自強新村。921大地震後の仮設住宅が斬新な住宅街に変わった。

九二一地震の後、台中に二つの原住民集落が現れた――
霧峰区吉峰村の花東新村と太平区頭汴坑溪河畔の自強新村である。
当時、拾い集めた廃材で作った急ごしらえの家屋は、
二十二年間に及ぶ各界の努力により丈夫な建物に生まれ変わり、
何代にもわたって暮らしを守っていく。

初 春の三月、変わりやすい天気が続

く中、お日様が顔を出した時に、
引越しする住民たちは好天を逃すまい
と作業を加速させた。少し暑さを感じさ
せる太陽の下、台中市太平区の自強新村
の住民、楊志豪（ヤン・ツーハオ）さんは、
奥さんと慎重にベッドフレームを軽ト
ラックから卸し、暫時、新居の玄関横に
置いた。一人のお年寄りがプラスチック

椅子に座って、彼らの出入りを静かに泰
然として、のんびりした様子で見守って
いた。

「こちらは母方の祖父で、九十一歳で
す。おじと一緒に住んでいます」。一家
では若い世代になる楊さんは、自強新村

自強新村の住民、楊志豪（左）は新居に引越し
た。91歳と高齢で、同じく自強新村に住む祖父
（前列着席者）も訪れて、引越しを喜びあった。



に住んでいる一家の様子を大まかに説明した。

四十五歳の彼は一家の大黒柱で、三人の子どものうち、長女は既に社会人である。九二一大地震発生時、僅か二十歳余りだった夫婦が、経験したことのない危険や恐怖をどのように乗り越え、生後たった二カ月の彼女を守ったのか、今となっては想像しがたい。二十二年の月日が過ぎ、幸いにも難を逃れた女の子は、母の背丈を超えた大人になった。次女と長男はそれぞれ大学一年生と高校一年生である。

「ここは元々広場で、周りは全て住宅でした」。楊家の長女が、旧自強新村取り壊し前の状況を簡単に説明してくれた。兄弟三人が覚えていたのは、一列に並んだトタンと板でできた仮設住宅、それに収穫祭と子どもたちの遊び場となっていた広場である。二〇一七年十一月に取り壊され、一家は賃貸住宅に引っ越し、その後、再び元の場所に建てられた新しい家に入居した。粗末だが子ども時代の笑いに満ち溢れたあの場所は、今は記憶をたどるほかない。

「四部屋に分けて、各部屋にベッドを

一つ置きました。寝起きできれば充分です」。慈済の支援で再建された自強新村に入居する楊さんは、三世代六人と身を寄せている甥が住めるように、配分された二階建て二十八坪の家を四つの寝室に分けた。実のところ屋内は少々狭いが、

を負担する必要はあるが、それでも一般の賃貸住宅に比べれば、かなり経済的な上、契約満了を心配することもない。

二十二年來の悲願

九二一地震後に取り急ぎ建てた前の建物に比べれば、雲泥の差である。大雨による雨漏りや台風の来襲を心配せずに済むだけでなく、一生住み続けられる上、次の世代に残せることが一番だ。

住民は入居後、自ら土地の賃借料、固定資産税、コミュニティの管理費など

三月六日の入居式当日、真新しい自強新村に入ると、目の前に広がっていた住宅は、十四坪の平屋であっても、多めの人数が入居可能な二十八坪の二階建て住宅でも、素朴ながらも堅固な作りで、コミュニティの横には憩いの場である公園があり、消防分署も近くにある。

九二一地震を経験して、二十数年過ぎてきた何人ものお年寄りは、この美しく快適な居住空間を目の当たりにして感涙し、引き渡し完了後に鍵を受け取った時、手を震わせ、眼には涙を浮かべていた。

「ちよつと信じられなくて、私も一時は『本当だろうか?』と疑っていました。ここまでの道のりは本当に大変でした」。高雄から来たブヌン族の趙秀珍（ツアオ・シウツン）さんは、実家はモラコット台風の被害で土石流に埋まった小林村にあり、若い頃に中部に嫁いで来て、夫と長年頑張つてやつと手に入れた家が、九二一大地震でもろくも倒壊してしまつ

た、と言つた。

大災害の後は生きていくのがやつとで、夫婦二人に住宅再建の力はなく、子どもを連れて頭汴坑溪河畔の自強新村に仮住まいするしかなかった。アミ族が大多数を占めるこの臨時の集落で、家族で近所と打ち解け、エスニシテイ問題も起こらず、皆で一緒に料理を作つて食べ、更には倒壊指定の建物に入って「資源回収」さえした。

「地震で損壊したアパートビルがあれば、ドアや窓を取り外しに行きました。私たちは、昼間は仕事があつたので、夜や休日の日曜日に家を建てました」と趙

慈濟建設支援 小ファイル



自強新村

- ・ 場所：太平区福隆里、頭汴坑溪河畔
 - ・ 世帯数：49戸
- 連棟住宅で、各世帯の人数に合わせて14坪と28坪の二タイプ。
集会所1カ所。

花東新村

- ・ 場所：霧峰区吉峰里、草湖溪河畔
 - ・ 世帯数：46戸
- 集合住宅全2棟、エレベーター完備、バリアフリー化、各世帯の人数に合わせて14坪と28坪の二タイプがある。
集会所1カ所。

さんが災害後の厳しい生活を語つた。苦楽を共にしてきた近所の人たちも加わつて話をしていた時、知らない間に昼の



十二時になり、「そろそろ花東新村へ行く時間よ」と誰かが注意を促した。

午後から天気は前線と寒気団の影響を受け、晴れからどんよりした曇りに変わったが、花東と自強の二つの原住民集落の九十五世帯の住民は、いつもの太陽のような情熱で曇り空や低温を吹き飛ばした。にぎやかに行われた新居落成式には、お年寄りから母親に抱かれた赤ん坊までが伝統衣装で参列した。

自強新村の連棟式建築と違い、霧峰区草湖溪河畔の花東新村は敷地面積が小さかったため、一般的な集合住宅形式を採用した。村は集会所と広場を核とし

てデザインされ、左右両側に三階建ての住宅が一棟ずつ建てられている。会場の空間がかなり狭いため、式典に参加しようとしてきた自強新村の住民と、階下に降りて式典に参加する花東地区の住民で、会場は瞬く間に人で溢れかえった。

伝統衣装を着た数百人の「アミ族」と、「藍天白雲（藍のシャツに白のズボン）」の慈濟ボランティアらにより、会場は喜びに満ちた人文のある美しい光景を成して

3月に自強新村（上の写真提供・台中人文真善美ボランティア）及び花東新村の恒久住宅への入居が開始した。住民は18年住んだトタン葺きの住宅に別れを告げ（下の写真提供・陳玉蘭）、4年間の賃貸住宅住まいを経て、新居に戻ってきた。

いた。この日まで慈済人は四年ほど、両村の原住民は台湾九二一大地震から足掛け二十二年待ち続け、ようやく「終の住処」の新居が完成した。

異郷でもあり、故郷でもある

「これは台中市で最も長くかかった工事で、十年以上になります。その間、市



花東新村の恒久住宅は3階建ての集合住宅で、中にはエレベーターとバリアフリー設備が備わっており、お年寄りの移動にも配慮している。

長が三人と原住民主任委員が三人変わりました。二〇一一年から着手して……。盧秀燕（ルー・シュウイェン）台中市長は、まず住民を代表して慈済と證嚴法師に感謝の意を表した。

続いて、慈済基金会の林碧玉（リン・ビユー）副総執行長が、法師の住民たちへの気遣いについて述べた。「法師は設計の段階で、建築士と二十回以上にわたって討論を重ねました。『これはただの住宅ではなく、住処を転々とする人たちに根を下ろしてもらおう意義もあるのです。また今の世代に限

らず、何代にもわたって、ここで生活を営んで欲しいのです』と言われました」。

花東と自強の両原住民コミュニティの支援建設プロジェクトは、民間の団体と政府の協力事業であり、社会的に弱い立場の人々に幸福をもたらす代表的な事例である。慈済ボランティアの思いやり、建設チームの心配り、そして様々な公務員の苦労を厭わない努力にも功労がある。しかし、何よりも大事な点は、原住民たちの自立した、家庭と集落の再建へのこだわりにある。

再建に向けた各方面の調整

一九九九年の九二一地震から僅か一月後、村人の手で新しい村ができあがった。住居は当時、霧峰郷吉峰村水利局ビル脇にあった空き地に建てられた。村人の大部分は花蓮、台東出身のアミ族だったため、「花東新村」と命名された。

家屋は臨時にトタンや板材で建てられ、飲料水は買わなければならなかった。また電気は借りてきた発電機を使い、生活面で多くの不便や困難が伴った。しかしながら意外にも、原住民の文化、考え方に

沿った生活環境が作り上げられた。近所の多くは同じ言葉、文化、生活体験を持つアミ族で、原住民が集っているため、重要な風習伝統も伝承することができた。

当時、花東新村ができて間もない頃、慈善団体も目に留めていた。慈済ボランティアは訪問後、村民にプレハブ住宅の再建支援を提案した。しかし、村民たちは将来も住み続けるかどうか、はつきりしていないことや、今の家は困難が伴うものの、せつかく心血を注いで建てたものを取り壊して再建する必要はないと考えた。そこで慈済はプレハブ式の交流施



設の支援建設に変更した。

この交流施設は村では新品の建材で建てられた唯一の建物で、村民に良好な公共空間を提供した。「幼児保育をはじめ、大学生による子どもたちへの補習、老人の介護サービスをここで行っています」。花東新村の住民で、アミ族の原住民語教師である陳玉蘭(チェン・ユーラン)さんが、深い感謝の意を表した。

長年台北で暮らしていた陳さんは、現両村には交流施設や広場などの公共空間が設けられており、村民の行事や幼児保育、青少年の補習、お年寄りの介護等のニーズに応えている。



代社会に軸足を置かなければならないと深く理解しており、肉体労働で生計を立てていた多くの原住民の境遇を変えるには、次世代の教育が極めて重要だと考えている。しかし、九二一地震後の状況に、

落成式当日、花東新村のある住居では、「情人袋（アミ族の伝統的袋）」を肩にかけた父親（左）が家財整理に勤しみ、息子（右）は既に民族衣装を身に纏って、原住民語の先生に学んでいた。

彼女の心配は更につのった。「多くの親は子どもを幼稚園に通わせることができず、小さい子どもを連れて仕事場である工事現場に行くなどとても危険でした。また、多くの子どもは中学校を中退したり、中学を卒業すると直ぐに嫁いで行く女の子までいました：」。

教育の重要性を知っていたため、陳さんは娘を花東新村で初めて大学に行かせただけでなく、五人の甥や姪たちもそれぞれ成功しており、前の世代より良い生活を送っている。

しかしながら、トタンや板材を合わせ

ただけの急ごしらえの住居は長く使うことはできず、情、道理、法律の各面から見て、管轄する政府機関、そして住民自身もその状況を放っておくわけにはいかなかった。

両村は国有財産署管轄の国有地内にあり、実際は違法にあたる。しかし、当時の九二一地震が突発的な大災難だったため、政府は寛容に対応し、後に両村に水道や電気を通して臨時に住居表示プレートを与えて、災害後の村民生活の復興に尽力したが、この特例を長く続けることはできなかった。

慈濟の師姐が鍵を渡してくれた時、震える手で扉を開けました。そして、扉が開いた時はじめて、「本当に私の家なのだ」と確信しました。

九二一地震の後、私たちは住む場所ができたとはいえ、あちこちで材料を拾い集めて、少しずつ家の概形を作っていくより仕方ありませんでした。私の実家は高雄那瑪夏区にあって、両親はモラコット台風で亡くなりました。慈濟がその時も原住民に恒久住宅を建ててくれたことは知っていました。今日、私は特別にブヌ族の民族衣装を着て、入居式典に参加しました。こんな美しい家に住めるとは、なんと幸せなのだろう、と思ったからです。—— 自強新村住民・趙秀珍

二十年前、私たちの家は外が雨なら中も雨という有様で、孫がたらいを持って雨漏りを受けていました。夜、風雨が強くなると寝ることもできず、とても疲れて、翌日の授業は半日しか受けられませんでした。先生に聞かれたので、事情を説明するしかありませんでした…。この数年は、他の場所の家を借りて、完成を待ちました。このように慈濟が、私たち家族が安心して住めるよう支援してくれたことに心から感謝しています。子どもには家が建ったのだから、ちゃんと学校に行くようにと、また若者も真面目に仕事し、これ以上あれこれ考えるのではなく、いい家があるのだから、大切に使うと欲しいと伝えました。—— 花東新村代表・王志雄



元々、面識のなかった村民同士が震災で出会い、大変な苦労をしながらも皆でゼロから新しい家を建て、ここを永遠の住処とし、家族同然に生活してきたのだ。しかし、急ごしらえの住居は長年住み続けるには堪えられず、台風が近づくと、村の若者たちは縄を張って屋根のトタン板を固定し、強風で飛ばされないよう予防した。「屋外は大雨、室内は小雨」というのが日常茶飯事で、子どもたちが成長して友達ができると、この粗末な環境を恥ずかしく思うようになった。

村民に合法で安全な住居を提供するため、元の場所に恒久住宅を建てるのが最

も理想的な解決方法だったが、「言うは易く行いは難し」であった。

盧市長が当時を振り返った。二〇一一年に胡志強（フー・ツーチャン）元市長がプロジェクトを始動した際、国有財産署は土地を無償で台中市政府に渡して使用することに難色を示したため、市政府は二〇一四年から、予算を編成して両村民の代わりに賃借し、両村の土地は「不法占有」から「合法賃借」となった。今年度の建設支援プロジェクトが完成し、引き渡し後に、村民が自ら賃貸料を払うことになり、土地の問題も解決したことで、再建が実現したのだ。

温もりのある家を建てる

二〇一五年、当時の林佳龍（リン・ジヤロン）台中市長は慈済に、台湾がここ十年近くに渡って推進してきた「公営住宅」の精神でもって、両村の再建支援をしてほしいと協力を求めた。

慈済基金会慈善志業発展処の呂芳川（リユー・フォンツワン）主任は、この支援建設方式で村民に住宅の「終身使用权」を与えることができると説明した。村民がもし、その他の住宅を所有してい

慈済ボランティアは各世帯に祝福のプレゼントを渡し、新居完成の喜びを分かち合った。

なければ、終身そこに住むことができ、亡くなった後は不動産を持たない直系親族による継承も可能だ。もし後日、不動産が買えるようになったり、或いは亡くなった後、継承する人や継承する資格がある人がいない場合は、政府が住居を回収し、他の入居資格を満たした、社会的に立場の弱い人を住まわせる。この方法は社会的支援の面でより間口を広くできるのである。

二〇一八年十月十九日の起工後、まず、政府が周辺の公共工事に取り掛かり、水道、電気、通信、消防の四大ライフラ

インを整備した。二〇一九年九月十月に実質的な建設工事がついに本格的に始まったが、その時、台湾は新型コロナウイルスの感染拡大に見舞われた上、工事は厳しい人手不足に直面していた。

「この一、二年は、台湾全土で建設労働者不足と資材不足が深刻ですが、建設業者はこのとても困難な条件を克服し、品質も良いものに仕上げました」。慈濟宮建処の林敏朝（リン・ミンツアオ）主任は、ドア枠やタイル、塗装の隅から照明・窓の施工までとても手が込んでいて、とりわけ屋根を構造体とし、上部には洗い出

し仕上げの保護層が施されており、「一度の施工できちんと仕上げれば、以後のメンテナンスが要らなくなります」と言った。

当初この建設支援プロジェクトを推進した林前台中市長は、プロジェクトの実現に当たり、「外観が美しく安全な住宅で、中は温もりのある家になっています」と賛辞の声を禁じ得なかった。入居式典の終わりに、行政院原住民族委员会主任委員のイチャン・パロール氏は、政府は両村の原住民に最高の就業サービスと子どもの原住民母語の学習、文化伝承そして高齢者介護を提供すると宣言した。

それと同時に、数百人の慈濟ボランティアとソーシャルワーカーが、掛け布団、照明スタンド、電気ポット、歯ブラシ、毛布など十二アイテムの入居記念プレゼントを用意し、一軒ずつ村民を祝福した。

困難な歳月を経て来た原住民のお年寄りたちは、若者が原住民の先達や社会の期待を裏切らないよう激励した。陳さんは、「私たちが彼らのために勝ち取った良い環境が、子どもたちの更なる努力を可能にし、集落に良い文化の流れが続くようにしたい」と語った。

（慈濟月刊六六五期より）



偏境の子供たちにきれいな水を

◎文・葉萍、邊靜（中国四川慈濟ボランティア） 撮影・葉萍 訳・明陸

中国四川省涼山州喜徳県の住民は、少数民族の彝族が主体である。地方の学校は全般に浄水設備が不足しており、教師や児童・生徒の生活用水は全て山から湧き出る水だが、雨季になると水は黄色くなり、土砂が含まれるようになる。



慈済は安全な飲み水プロジェクトを展開し、二〇二一年七月から十二月にかけて喜徳県の三十の学校にウォーターサーバーを贈呈した。住民の冷水を飲む習慣に合わせ、摂氏三十五度に設定しているが、冬は温水も飲めるようになっており、一万四千人の教師や児童・生徒が恩恵を受けた。

山の麓から遠い道のりを運ばれて来たウォーターサーバーから、安定した大量の水が出てきた。李子卿愛心小学校の生徒たちは珍しそうに見ていた（前ページ写真）。以前、子供たちは蛇口に口を着けて飲んでいた（写真上）。ボランティアは皆に専用のコップを配り、健康的な水の飲み方を身に付けるよう期待した。

◎文、撮影・Janatica Digo（慈済フィリピン支部職員）
訳・常樸

フィリピン・ケソン市 初めてのワクチン パーティーを体験

楽しいパーティーのような会場に入ると、マスコットキャラクターが子供たちを出迎えて登録手続きをした。ケソン市では、五歳から十一歳までの子供に新型コロナウイルスのワクチン接種が始まった。慈済治療センターの医療スタッフとボランティアは去年すでにワクチン接種に投入したが、今年二





月の場合は、今までは全く異なるチャレンジだったと言える。

子供は注射が怖い。百人あまりの医療スタッフとボランティアは、小児科のワクチン接種トレーニングをオンラインで研修し、様々な状況をシミュレーションして臨んだ。当日は異なったキャラクターに扮装して、子供たちにとって、ワクチン接種が面白い体験になることを願った。「注射は本当に怖かったけど、お医者さんが優しく、すぐ終わりました」と、マギーが涙を拭きながら言った。ママのテレサもほっと安心した。親子は接種後のプレゼントを持って、喜んで帰って行った。これで子供は、登校しても学校生活を送ることができる高い免疫力を得たのだ。（慈済月刊六六五期より）



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・陳九熹

心が通じ合えば、
世に幸せがもたらされます

衣食足りた生活と雨風をしのぐことができる家があることは、
なんと幸せなのでしょう。
このような幸せも人心が通じ合うからこそです。
人同士がお互いに和氣藹々として愛を携えていて
初めて、この世が幸せになるのです。

物 が豊富にあつて、気候にも恵ま
れ、生活が安定すれば、一般の
人は楽しい人生だと感じますが、世の
中には苦難にある人がたくさんいま
す。様々な苦難があるのですが、そ
れは人心の不調和から来ており、「貪、
嗔、癡」が人災を引き起こしていま
す。土農工商のどれに従事してい
ても、全てを投げ出して逃げるしか
なく、直ちに落ち着く先がなくなっ
て、四大元素の調和が取れず、風が
吹けば家が壊れ、洪水になれば良田
を覆い尽くします。或る地方は一本

の草も生えないような旱魃で、酷い飢饉が起きています。更に想像し難いほどの貧困によつて子供たちはお腹いっぱい食べることができず、栄養不良に陥っています。人々は休むテントがあるだけで、寒さを凌ぐことはできず、暑い時は灼熱の太陽の下、耐え難い状態になります。

この世の苦しみも衆生の共業（ごうごう）によるものです。凡夫は良い話を忘れがちなのに、人から受けた中傷は忘れられず、それが心に残つて、繰り返し複製されてしまいます。偏見があると、相手を見ただけ受け入

作り、人間（じんかん）の日陰になりましょう。

ウクライナとロシアの戦争が続く中、国家も社会も安寧できません。どんなに堅固な家屋も瞬時に倒壊し、無事の人民は住まいを追われ、また多くの子供たちは親を亡くしています。難民は連綿と国境に押し寄せ、それを越えれば、平安が待っていますが、何時になったら家に帰ることができのでしょうか？また若い母親たちは子供を親戚や友人に託してから、国を守るために戻っています。後ろ髪を引かれる思いで離別し、生死の別

れることができず、歓迎しなくなつてしまいます。たとえ相手が良い言葉を掛けてくれても、それを曲解し、それら全てが無明の煩惱を増長させるのです。相手の過ちを気にし続けていると、恨みつらみになってしまい、その悪縁が何世にもわたつて影響を及ぼすので、安らかになることができないのです。

無明の中で攪乱されてはいけません。見返りを求めない誠意で以て良縁を結べば、その分悪縁が減ります。自分の心田を耕して愛を啓発し、福田を広げて善の種を蒔いて菩提の林を

れのように、何時再会できるかわからないような悲惨さを思うと、心が痛みます。

隣国のポーランドで愛の力が示されました。見ず知らずの難民を家に住ませたり、道路沿いに温かい食事を提供したりしています。ドイツ、イギリス、フランスの慈善人が集まって、ポーランドにいる数人の若いボランティアが毛布と、現金同様で、商店で生活用品を買うことができる、プリペイドカードを配付する手伝いをしました。故郷が爆撃に遭い、命からがらポーランドに逃れた人たち

は一文無しです。何処へ行ったらよいか分らない中、遠方から来た人たちの見ず知らずの愛に触れ、彼らは落ち着きを取り戻し、笑顔返すその目は潤んでいました。

このような画面を見るととても感動しますが、感慨深いものがあります。天下は元々一大家族なのに、睦まじさを壊し、こんなにも多くの人が苦しむことになっていくのです。私たちは彼らの形容し難い苦しみを代わって形容することはできませんが、「人傷つけば我痛み、人苦しめば我悲

しむ」という気持ちを持って、因縁を逃さず、ぬくもりを与えなければなりません。物資の配付だけでなく、温かい情もなければならず、彼らの身に厚い衣服をかけ、優しく寄り添うのです。これこそが長く続く情であり、一時の寒さを解決するだけではなく、心に残る温かい情でなければならぬのです。何時の日か、その情で以って助けを必要としている人を気遣うことができれば、世界は変わり、邪気を和やかな雰囲気に変えることができるでしょう。

衣食足りた生活、風雨を凌ぐことができる建て物は、なんと満ち足りた人間（じんかん）の浄土なのでしょう。このような幸せは心が通じ合い、小は人と人との間、大は国と国の関係に至り、お互いに和して愛し合っこそ、人間（じんかん）は幸福だと言えるのです。

国家が平安でなくなれば、社会は不安定になります。これは正に「大いなる教育」だと言えます。世の中の平和を望むなら、人心に愛があつて初めて、「通じ合う」ことができるの

です。誰もが和して助け合うことこそが、人生における大きな幸せなのです。「好天時に雨に備えて糧を貯える」と言われるように、今日の平安は、昨日に造った福ですから、福を知って、福を大切にし、更に福を造らなければなりません。誰もが良い心がけをし、良い言葉を口にし、良いことを行なうと、衆生は「共に幸せ」を造らなければなりません。

若し自分の考えに固執するならば、目に見えるのはわずかな範囲にしか過ぎません。心の世界をもっともつと

広げなくてはなりません。今は科学技術が発達しており、私たちは遠く何百、何千キロも離れた場所にいる彼らが今、どういう生活をしているのかを見ることが出来ます。人々の泣き叫ぶ声を聞けば、相手の身になって思いやり、自分がどうやって「苦を見て福を知る」ことができるかを考えなければなりません。自分だけがやるのではなく、「大我」を動かして、大愛を奉仕するのです。

人は皆、仏と同等の心を持っていますが、それが慈悲を掛けて憐れみ、衆生の大愛の心を護ることなのです。自

分に元から備わっている仏性に気づきさえすれば、善行するのは困難なことではなくあります。人心が浄化されさえすれば、誰もが安心した暮らしをすることが出来るのです。言うは易く行うは難しと言われますが、一匹の小さな蟻でも願力を尽くせば、その命に代えてでも須彌山に登ることが出来ます。この世にこんなに多くの人が苦難にあるのを見れば、私たちは僅かな力であっても、それを寄せ集めれば、無数の苦難の人々を助けることができます。皆さん、心して精進してください。(慈濟月刊六六六期より)

健康の玉手箱

リサイクルステーションに来て

若返った

シニア世代がリサイクルに参加することで、健康促進の効果が実証された。毎日「運動する、頭を使う、人と交流する」ことを続ければ、もっと若々しく生きられる！

「リサイクル活動に参加すれば、体が丈夫になり、悩みがなくなる！」とは、多くの慈済ボランティアが口にする言葉である。実は、七十歳を過ぎたりサイクルボランティアは、大多数のシニア世代と同じように血圧、血糖値、脂質

異常等の慢性病を抱えているが、心身医学専門の李嘉富(リー・ジアフ)医師の観察によると、これらシニア世代は同じ年代の人よりもずっと活力がある。二〇一六年、台北慈済病院の李嘉富医師は研究チームを率いて、慈済双和リ

文・葉子豪 挿絵・林家陸 訳・江愛寶

サイクル教育ステーションを選んで、ここに来る七十九人のボランティアに実験に協力してもらい、リサイクル活動が健康促進に与える効果を研究分析した。

「あの時の研究プロジェクトは、六十五歳以上のリサイクルボランティアを対象にしました。平均年齢は七十三歳で、台湾国民の『健康余命』を超えています」。李医師によれば、「健康余命」とは、体が健康で、自立した生活ができる年齢なのだそう。

当時、国民の平均寿命は既に八十歳に達していたが、健康余命は七十二歳に届かなかった。今ではその差は益々広がり、

大部分の人の最後の八、九年ないし、十年間自立した生活ができず、寝たきりの「不健康」な状態で過ごしていることを意味している。

リサイクルステーションにいる年配者たちも慢性病を抱えているが、研究結果は、高齢者の健康に関して参考に値するものになった。

「私たちはプロジェクトを始める前に、ボランティアたちの血圧、認知機能、痛み及び情緒状態、自律神経機能等の指数を測定しました」。続いて李医師のチームは、研究開始から四カ月目に中間測定すると共に、実験参加者たちがリサイク

ル活動をしている間、毎回少し時間を作って「環境保全健康体操」をする事で体をほぐしてもらった。そして八カ月目にもう一度、測定した。

李医師は、七十九人のリサイクルボランティアの中で、週に一回以下しか参加しなかった人の組は平均年齢が七十三歳で、週に三回以上参加した回数が多い組の平均年齢は七十七歳だった

ことに気がついた。参加回数が少ない、まあまあ、多いの三組の研究に参加する前の心身状態は、統計学上でははっきりした差異はなかった。「しかし、毎週少なくとも三回以上来た人は八カ月経つと、血圧が安定し、体の



痛みが緩和され、認知機能や記憶力が改善し、自律神経の調節機能も、リサイクルステーションに来る回数が少ない人よりも良くなっているのです」。

言い換えれば、平均年齢が最も高く、最もよくリサイクルステーションに来る年長者の健康年齢は、三、四歳若くてもあまり来ない参加者より良くなっているのである。

被験者の中で、積極的に参加する組の心身の健康は明らかに改善している。李医師は、慈済のリサイクルステーションは最高の「デイケアセンター」であり、「運動する、頭を使う、人と交流する、という『三動』を兼ね備えている」と言った。

かしたり、ついでにトイレに行ったり、水分を摂ったりするよう、注意を促している。

「長く座っていると、心血管が悪く、特に低血圧の人にとってはよくありません。もし、三時間座りっぱなしの場合、血圧は低くなり過ぎ、認知機能が衰える可能性があります。ですから、座っている時間を何回かに分割することです」。李医師は特別に、「怠けているのではなく、より長い道を歩くためなのです」と強調している。

自身も若くない李医師の概略的な推計によると、高齢者が日常的に「運動する、頭を使う、人と交流する」ことを持続で

しかし、ボランテアたちの健康はやはり注意が必要で、特に血圧は重要である。高過ぎても低過ぎても、脳卒中と認知症のリスクが増えるのだ。そこで、李医師は特別に、リサイクルボランテアに自分たちの体の状況を把握してもらうために、定期的に血圧を測り、そして政府が六十五歳以上の高齢者に提供している無料の健診を活用することで、定期的な検査で病を未然に防ぐよう、注意を促している。

彼はリサイクルステーションの責任者と幹事たちに、皆で「環境保全健康体操」をするように勧めた。ボランテアたちが作業を一時間続けたら、立って体を動

きる場合、例えば、リサイクルステーションでボランテアをし、家において「テレビに見られる」ことを避け、健康で楽しく生きれば、介護に頼る必要はなく、「月に三万元以上稼いだことに匹敵する」のである。

「ですから、私はよく高齢者にこう言います。子供さんはもう大人になったのですから、あなたの責任は終わっているのです。唯一しなければならぬのは、きちんと自分の世話をすることです！あなたがボランテアをして、利他行為をすれば、心の持ちようは変わってきます！」。李医師はこうアドバイスする。

（慈済月刊六六四期より）

スマホ世代が 古典文学を好きになつた時

問

私は若い時、中国文学でも西洋文学でも古典を読んでとても感銘を受けたのですが、子供にも文字の魅力を知ってもらい、読書を楽しんで欲しいと思っています。でも子供は、必要な時にはスマホですぐ調べられるから、と言うのです。

答

文字の魅力は、作者が文章の行間にこめた思いを読み取るころにあります。情景の描写でも感情の描写でも、一字一句が読者の心に響けば、それは人を夢中にさせる本です。電子機器が溢れ

る現在、子供にそれらを捨てて、古典文学を身近なものにするよう導くのは確かに難しいでしょう。ですが、少し工夫すれば、それほど難しいことはありません。

遊ぶことから始める

ある父親のやり方は参考に値します。息子と一緒に三国志をテーマにした動画を見てから、息子が三国志の登場人物のファンになったのです。続いてその勢いで、子供を連れて図書館に行き、三国志と関係のある本を借りて来て読みました。その次は、三国志をテーマにしたボードゲームを買ってきて、子供と一緒に遊びました。最後には小学校二年生の息子が三国志通になったのです。

私たちもお父さんのように、心して導いて行けば、子供は必ず電子機器を捨てて、文学の懐に転がり込むでしょう！

子供の好みに合わせる

「孫子の兵法」に、「敵を知り己を知れば、百戦してあやうからず」とあります。まず、子供はどんな本が好みなのかを理解します。推理小説、恋愛小説、任侠小説、古典など、子供の好みに合わせて、少しずつ導いて触れさせることで、自然と文字の魅力の中で遊べるようになります。

子供にすぐ古典文学に触れさせるのは少し難しいと思います。個人的には、先ず国内外の小説を見させるのがいいと思います。例えば、任侠小説ならばあらゆる年齢層に適しており、文学と歴史の観点も兼ね備えています。親がストーリー

テラーになってあらずじを子供に語り、それから、その本が映画化されていけば家族で一緒に見たり、話し合ったりするのです。子供が本当に面白いと思いはじめたら、蔵書を取り出してリビングの目立つ所に置くのです。子供が本の全てを知りたいと思った時、自分で取り上げて読むようになるでしょう。その時、文字の魅力や読書の楽しさは、知らず知らずのうちに子供の頭の中に刻み込まれるのです！

付き添いは最上の方法

ロシアの文学者ゴーリキイはこう言ったことがあります。「本は人類が進歩するためのステップであると同時に一生の

伴侶であり、誠実の親友である」と。子供が電子機器から遠ざかって、文学作品に近づいてほしいと願うならば、身を以て模範を示してください。自ら電子機器を使わず、久々であっても本を出して読むのです。あなたが読書の楽しさにふければ、子供は必ず影響を受けます。子供に付き添って読書することは、読書を習慣にして興味を起こさせる重要な方法です。親が黙々と子供の側にいて、それぞれ一冊の本を持って文字の世界に陶醉するのです。この方法は比較的容易で、プレッシャーもなく、家に読書の雰囲気が生まれるようになります。文字の素晴らしさと魅力は、自然と子供の心に刻まれ、作者と心の対話を楽しんでもら



(慈済月刊六六三期より)

うことができます。どのくらいの時間付き添えばいいかというと、毎日少なくとも一時間を費やしてはどうでしょうか。有名な児童文学作家のヨースタイン・ゴルデルの言葉です。「最も賢明な親は、子供に十分な衣食を提供した後に続く一番大切なことは、子供のために一番良い本を選んで持ち帰り、彼らの寝室に置いておくことです」。

何事も始めはうまくいかないかも知れませんが、方法と目標が見つければ、遠い道程を恐れることはありません。良い文学の種を蒔くことは大切なことです。親が心を込めてその種を蒔き、長い期間をかけて耕すのです。いつか必ず、文学という常緑樹が、心を込めて築いた家と林となるに違いありません！

香港 コロナ禍の第五波

急速にピークを更新

私たちのコミュニティもロックダウンしたり、

強制PCR検査を実施したりするようになるのだろうか？

もし家族が感染したら、この小さな居住空間でどうやって隔離したらいいのだろうか？
道ですれ違った人は、感染者だろうか？

香港の第五波は、人々を恐怖の頂点へと押し上げた。

コ

ロナ禍の暗い陰が全世界を覆って

二年以上になる。香港は四波のコロナ禍を経験して、ようやく一息つくこ

とができ、かなりの間、感染者ゼロをキープしたので、政府は少しずつ感染予防対策を緩和した。二〇二一年の初夏か

ら徐々に元の生活に戻り、偶に散発的に陽性者が現れたが、日常生活に影響することはなく、私たちもポストコロナの新しい生活様式を受け入れ始めた。

私の五歳の子は、幼稚園の年長クラスに通っている。コロナ禍で一年前のクラスは殆ど自宅にいて終ったが、ようやく幼稚園に戻り、先生やクラスメートと会えるようになった。楽しく幼稚園に行つて勉強し、午後は一緒にお母さんたちに連れられて公園で遊び、お母さんたちも互いに世間話しをした。それは極めて平凡な日常生活だった。

あの時、私たちは香港に住んでいるこ

とがとても幸せだと思っていた。他の国や都市の感染者数が何千、何万人だったからだ。私が小さな幸福に浸っていた二〇二一年末、香港ではコロナ禍第五波が始まり、オミクロン変異株の感染が初めて確認された。政府は人の流れを制御したが、旧正月前市場や商店街は、例年のように食材や花の買い出しをする人で賑わっていた。

ウイルスは瞬く間にコミュニティに広がって収拾がつかなくなり、感染者数はうなぎのぼりに増加して、数百人から数千、数万人になったのは僅か二カ月という短い期間だった。その後、幼稚園は

授業停止になり、子供は自宅で遠隔授業を受けたが、五日間そうしただけで、二月二十二日、政府は香港全域の学校の夏休みを三月と四月に前倒しすると公布した。

二月十一日、ある四歳の男児が新型コロナウイルスに感染して亡くなった。翌週さらに三歳になる女の子が亡くなった。全世界でコロナが広まって二年余り、幼児は言葉を習い出す頃からマスクを付けないければならず、初めは拒否をしていたが、慣れるしかなかった。今では親が外出する時にマスクを忘れたら、小さな彼らが注意を喚起する、と言った具合である。外出時にマスクを着用し、帰宅し

ビクビクしながら、 誰もが身の危険を感じた

昨年二月、香港政府は民衆に無料のワクチン接種を始めたが、多くの人、特に年配者がそれに呼応しなかった。主な原因は、ワクチン接種後の副反応に関する報道を聞いて、彼らが信用しなかったからだ。私は口を酸っぱくして、義父と義母にワクチン接種を受けるよう勧めた。また台湾の家族の例を挙げて、たとえば性疾患を抱える人でも受けることができ、三回目の接種までも受けていると説明した。

たらしっかり手を洗うことは、この時勢では二、三歳の子供が学ぶべきことであり、自分を守ると共に生活の常識でもあるのだ。

香港は非常に狭い土地に七百五十万人が住んでおり、人口密度が高いことも爆発的な感染を引き起こした原因の一つになっている。ウイルスの変異株は感染がとて速く、しかも目に見えないため、親として子供を保護する能力に限りがある。ワクチン接種の年齢が三歳児にまで引き下げられると、初めは躊躇していた私も多くを考えず、子供を接種に連れて行くことにした。

政府は、ワクチン接種は重症化予防になると宣伝し続け、第五波では、更に新しい予防措置として、シヨッピングモールやスーパーマーケット、レストランなどの公共施設では接種証明がないと入れないようにしたが、効果はなかった。普段は毎朝必ずヤムチャに出かける我が家のお年寄りたちは、愛して止まないヤムチャに行くのは諦めたが、ワクチン接種は受けようとしなかった。若輩の私たちはただ彼らの決定を尊重し、できることは彼らの健康を守ることだけだった。私は慈濟香港支部でジンスー本草飲（漢方茶）を買って、週に五回飲むようお願い



した。お二人とも飲んでくれているので、とても感謝している。

公営住宅のコミュニティーで絶えず感染拡大が報道され、政府は大胆に五日間のロックダウンを実施し、住民に対してPCR検査を強制するなどの措置を実施した。ロックダウンされた住民は自宅待機しなければならず、検査を受ける時だけ外に出ることを許された。二月の天気は湿度が高くて寒かったが、強制検査エリアには長い行列ができた。社交距離を維持するのも難しいのに多くの人が一、二時間待たされ、その中にはお年寄りも少なくなかった。

同じように公営住宅に住んでいる私た

ちは、何時自分たちがロックダウンされ、強制検査の対象になるのか、不安だった。家には年寄り二人と五歳の子供がいるので雨風の中、外で並ばなければならなくなったら、どうしたらいいのだろう。

一日の感染者が千人単位になった時、公営医療機関は負荷が超過し、医療スタッフが不足して、救急外来は患者でいっぱいになった。多くの患者は診察室の外のテントで横になって待つしかなく、寒さが骨身に沁みていた。また、家に重症患者がいる場合、家族が救急車を呼んでも、なかなか応じてくれなかった。政府の専用ホットラインはなかなか繋がらず、人々は自分に頼る以外に方法がな

かった。多くの陽性患者の家庭には年長者と子供がいるので、軽症者が何とかして外出し、食料や日用品を購入するしかなかった。

買い物で外出する時、道ですれ違う人は感染者ではないかと疑い、怖くなる。もし、私たち一家六人の中に感染者が出たら、この狭い住空間で

●香港全域で感染者数が急増し、高齢者施設のスタッフは、まるで大敵が攻めてくるように感じた。彼らは職場でしっかり入居者を守り続けており、慈濟ボランティアは防疫物資を支援した。(撮影・謝勤)

の中では、一層自分の心身を落ち着かせることが大切です。正知（正しい知識）と正見（正しく見る）でもって物事を考え、取り乱した恐怖心を鎮め、生霊を呑み込む貪欲な念を止め、菜食して、自分も他人も天地万物を愛護して、環境の中に溶け込んで共に生きて行くことです」。

近所の親友から電話で、彼女の五歳の子供が発熱して、家族全員が自宅で抗原検査をしたところ、皆、陽性と判明した、と言ってきた。しかし、この時期、クリニックと私立病院は、上気道感染、発熱、あるいは感染確定者を受け入れていない。彼女は仕方なく子供がよく診察に行

くクリニックのホームドクターにお願いして、過去のカルテに沿った薬を処方してもらおうしかなかった。しかし、家族全員が感染したため、クリニックに薬を貰いに行く人がいないので、私に助けを求めて来たのである。コロナ禍ではより一層協力して助け合うことが必要だ。もし私たちがその立場だったら、誰かに救いの手を差し伸べてほしいと思うだろう。

友人が自宅療養の様子を話してくれたことにも感謝している。子供は医師からもらった解熱剤と咳き止め薬を服用して症状が緩和し、大人はワクチン接種をしていたため、自分で市販の鎮痛剤を服用

どうやって隔離し、子供と年寄りを守ればいいのだろう。もし、子供が感染したら、救急外来や隔離病棟に搬送しなければならぬが、両親が付き添うことはできず、子供は一人で過ごさなければならぬ……。様々な仮説と良くない憶測が私をパニックと不安に陥れた。

相手の身になって、互いに助け合う

異国に住んでいる私は、幸いに慈濟の法縁者に気遣ってもらおうと共に、證嚴法師の法語も私の心を落ち着かせてくれた。證嚴法師はこう開示した、「コロナ禍

プロフィール 香港の新型コロナウイルス感染状況

- 第5波の感染拡大は3月4日にピークに達し、数日続けて、1日の感染者数が5万人を突破した。
- 3月下旬の感染者数累計が百万人を超えた。香港大学の推計では香港の人の約半数が感染しているとのこと。
- 第5波では4000人以上が死亡し、その9割はワクチン接種をしてなかったり、2回の接種を完全に受けてなく、死亡者数は過去の4波の合計を上回った。
- 香港政府の対応策として、簡易検査の陽性者を感染確定者と見なし、集中隔離的な「方舱病院」を建設した。

し、一家四人は水分を多く取って休息すること、ゆつくりと体調を回復させ、やっと無事に難関を乗り越えた。この事で私はそれ以上パニックになることはなくなつた。人助けする過程で、実は自分を助けており、もし不幸にも感染した時は、如何に向き合い、対処すればいいかが分かつたからだ。

香港と中国本土の間を行き来するトラック運転手も次々と感染したため、中国本土内から香港への野菜の供給にも影響が出て、野菜の価格は一斤（約六百グラム）当り十数香港ドルだったものが、最も高いもので四十ドル、更には七十ド

ルに値上がりしたものもあり、手が付けられない状態になつた。野菜不足になつてから、間もなく二軒の屠殺場でクラスター感染が発生し、百名近い作業員が感染して、たちまち新鮮な豚肉が市場に出回らなくなつた。調査報告によると、香港人の食肉消費量は、世界でも有数なのだそうだ。

このことで、證嚴法師の開示を思い出した。世の中で最も満たすことができないのが鼻の下にある口である。味や食感の満足のために、地上のさまざま姿の生命をお腹に入れる。牛や豚、鶏、アヒルなど、数え切れないほどの種類の

生き物を食べるのである。コロナ禍の発端を振りかえってみると、人類の食欲から来ており、「病は口から」と言われるように、野生動物を食べているうちにウイルスもお腹に入ったのである。

慈濟香港支部は今回の感染拡大の中で、積極的に「大いなる教育、菜食しかない」活動を推し進め、誰もが齋戒して、菜食し、コロナ禍が速やかに収束して、災害のない世界になり、真心で祈って共に善念を寄せ合うよう呼びかけた。

感染状況は日増しに深刻になり、政府がロックダウン対策も排除しないと発表するや否や、民衆にパニックが起き、買

いだめ現象が起きた。日用品だけでなく、市販の鎮痛剤、風邪薬、解熱剤などの売り場は一掃され、あらゆる防疫物資の価格が跳ね上がった。台湾の家族と慈濟の法縁者が関心を寄せ、香港に何か送るものはないかと聞いてきた。

二〇一八年に主人と共に香港に移住したが、僅か三年余りの間に、二〇一九年には社会運動、二〇二〇年からはコロナ禍を経験してきた。この混乱とコロナ禍の中で、私は愛と寄り添いがあってこそ、力が生まれ、愛があるからこそ、あらゆる人と共に乗り越えられるのだと実感した。（慈濟月刊六六五期より）

荒涼とした戦場 ホタルが淡い光を放つ

◎文・撮影 謝勤（香港慈濟ボランティア） 訳・御山凜

私たちは高いリスクを冒しながら、各機関に防疫物資を届けた。ここは戦場ではないが、見渡す限り荒涼とした感じを受ける。ただ同時に第一線の人々が依然として役目を全うしていることに尊敬の念を覚える。愛がホタルの光のように、遍く香港の空に点滅してほしい。

去

年の後半、香港はコロナ禍の第四波による陰影が徐々に薄れ、何カ月も市中感染がなく、規制も段階的に緩和された。宗教活動も条件付きで解放され、私たちは二年も開催されなかった慈濟歳末祝福会が、予定通り今年の一月に、八回に分けて、小規模で催されることを

期待した。

ただ、思うようにいかないのがこの世の常である。第五波が短期間で迅速に悪化し、一月五日に政府は、ソーシャル活動の規制を強めたので、それに伴って支部も歳末祝福会の中止を表明した。

私はもう二年も、年老いた両親がいる

実家に帰っていない。すでに高齢だが、来る日も来る日も私という娘を心配し、たとえ病気になっても姉妹に口止めして自分たちは大丈夫だからと心配をかけないようにして、私がきちんと自分と子供の面倒を見られるようにしてくれている。コロナ禍が過ぎるのを待ち、隔離の必要がなくなった時に、福建省の実家に帰ればいいように。

今年の冬は長くて憂鬱である。感染者数、疑似感染者数、死亡者数、死亡率……日々このような数字を目にしなければならぬ。

コロナ禍が厳しくなるにつれ、周りに感染者がどんどん増えた。初めの頃はウ

イルス検査の報告は当日に出ていたが、やがて二日、三日、時には一週間と待たされるようになり、さらには一週間後になり、香港の医療体制の負担は相当重くなった。大勢の人が抗原検査を受けるため、検査センターや簡易検査所はいつも殆ど満員で、マスクが日常生活の必需品であると同時に、簡易検査キットの需要も増え続けた。

慈濟香港支部静思堂は、集会禁止令で暫時開放されなかったが、慈善の歩みが滞ることはなかった。皆一層、心と愛を募り、様々なルートを通じて防疫に必要な物資を購入した。

二月二十四日、広東省の師兄が私たち



に代わって購入した五万個の新型コロナウイルス抗原検査キットが、香港に到着した。他にも、在宅信者が寄付した四千個の政府指定メーカーの検査キットが、同じ頃に支部に届いた。

慈濟花蓮本部は香港を支援して、二十フィートコンテナに七百四十六箱のジンスー本草飲（漢方茶のティーバッグ）、本草飲濃縮エキス、本草エッセンス及び九万回分の抗原検査キット等が入っており、台湾から香港に送られた。また、在宅信者が寄付した四万回分の新型コロナウイルス抗原検査キットも間もなく到着した。その他、支部が発注した韓国からの五万枚のマスクは、三月二日に香港に

到着した。

林惠鴻（リン・フイホン）師姐（スージェ）がこのことを知らせてくれた時、私はとても感動した。こんなにも多くの師兄や師姐たちがずっと頑張っているのに、私は何もしていないのだ。そして、私も出勤して慈濟の防疫慈善活動に関する記録を取ることぐらいはできる、と惠鴻師姐に相談した。

私は長女と暮らしているが、長女はピアノの先生で、レッスンで多くの生徒と接触しているし、私も仕事をしているので、人と接触しないわけにはいかない。そのため、出勤してボランティアすることは、さほど懸念することではない。

訪問ボランティアは、絶えずケア世帯、三無世帯（公営住宅、総合社会保障援助、単独の電力メーターが無い）、さまざまな団体や施設と連絡を取って状況を把握し、防疫物資が足りているか、緊急支援が必要かどうかを確認した。

私は幸いにも、支部で二日間の梱包作業と三日間の防疫物資の配送に参加することができた。そこで師兄や師姐たちの努力を目のあたりにした。彼らは最少の人手と最速の仕事ぶりで、気を配りながら物資の梱包と配送を終えた。

●あらゆる防疫物資はボランティアが一軒一軒連絡を取り、生活困窮者の必要に応じて配分する。梱包する前は注意深く資料と照合する。（撮影・徐淑琴）

尊敬に値する仲間たち

二月下旬から三月上旬にかけて、感染状況は深刻化していった。毎日新規のケースが万の単位になり、先行きが憂慮された。しかし、慈済香港支部執行長の施頌鈴（シー・ソンリン）師姐が言うように、状況は厳しいが、何をするにしても、ボランティアは一声で集まってくれるのだ。ボランティアの梁潤雄（リャン・ルンシオン）師兄（シーシオン）と何俊佑（ホー・ジュンヨウ）師兄の家には、どちらにも幼い孫が二人いる。家族は子供が感染することを心配して、彼らの外出を嫌うが、彼らは勇敢に任務を引き受けている。

がコロナ禍に対して不安を感じ、お年寄りを心配していることがよくわかった。またこのような仕事に携わる人は皆、大愛の心を持っており、それは最も人を感動させるものである。

第一線で同僚たちが次々と感染する中、彼らは依然として自分の役目を全うしている。最も尊敬に値する人たちである。

この困難な時期に、彼らのために手を差し伸べ、彼らを通じて上人の愛、慈済人の愛を伝えることができた。私たち皆が奉仕した諸々の愛と力の全てが価値のあるものであることを信じている。

防疫物資が不足した状況はそれぞれ異なっていた。簡易検査キット、マスク、

今回、物資の配送は高いリスクと向き合わなければならず、六十歳以上の師兄たちにとっては容易ではないが、彼らには悔いも恨みもない。配送中、私たちはコロナ禍での苦しみを目にした。

視覚障害者施設や養老院などでは相次いで感染者が出たが、その多くは施設内の自分の部屋での隔離を余儀なくされた。それに加え、看護等を担当する人にも感染者が出て、施設の運営を維持するには、深刻な人手不足になり、仕事量が重くのしかかった。

そのお年寄りたちを見舞うことはできないが、各施設の責任者や看護師、ソーシャルワーカー、職員と会う中で、彼ら

防護服、手袋、アルコール消毒液：様々で、できる限り提供した。コロナ禍の影響で、貨物輸送が滞り、非常に多くの物資が香港に届かなくなった。野菜や副食品の価格が高騰したため、一般家庭の生活も厳しくなった。ボランティアの李国富さんは、防疫物資を届けた後、引き続き食料とスーパールのギフト券が入った祝福パックを、必要としている家庭に配達する準備を整えて、各施設に届けた。

人間（じんかん）には苦難が多いが、人間に菩薩がいて、愛がある限り、どれほど多くの苦難があっても、私たちはそれらを乗り越えることができる。香港を祝福し、コロナ禍が収まることを願っている。

安心と祝福を家に届ける

編集・林惠鴻（香港慈濟ボランティア）

人に接し、物事に対処する時、穏やかで礼儀正しく、笑顔で親しみやすい、というのが、慈濟ボランティアの王純純（ワン・ジュンジュン）さんが人に与える印象である。香港で第五波の中、彼女は思いやりでもって積極的に、先ず、コミュニティボランティアと一緒に施設とケア世帯と連絡を取り、そして訪問ケアチームに報告した。最も早いスピードで防疫物資を届けることが先決であったからだ。

市場では、抗原検査キットを争って購入する現象が起きていた。彼女もボランティアと慈済会員一人一人に必要なかどうかを聞いて回った。ある会員は無症状だったが、検査によって感染したことが分かり、直ちに治療を受けた。

なからぬボランティアが感染している。彼女は車で支部に行つて防疫物資を乗せて戻り、呂美恵（リユー・メイフイ）さんが大囲区と沙田区の配付を担当した。馬鞍山区は仇文英（チョウ・ウエイイン）さんと馮少蘭（フォン・シャオラン）さんが届けた。將軍澳区は施淑卿（シー・シューチン）さんと黄金珠（ホワン・ジンジュー）さんが、それらをコミュニティに持ち帰って配付したので、ボランティアたちはいち早く受け取ることができた。

コロナ禍でもケアが途切れることはなく、王さんは絶えず感染した法縁者と会員を気遣った。スーパーでアルバイトしている蔡（ツァイ）師姐（スージエ）は、感染隔離期間を終えた時の検査では陰性だった。体は弱っていたが、スーパーは人手が足りなかったた

また、慈済から簡易検査キットを受け取ったある会員は、旦那さんまでも感激していたと言った。このような困難な時期に、彼らは社会のために何もしていないのに、慈済は積極的に素早く人々の支援をしているのだ。以前、慈済を誤解して、寄付を止めてしまったことがある。王さんは慈悲と智慧でもって会員を励まし、噂のために善の心が惑わされて、途絶えてしまうのではなく、元々慈済に寄付しようとしたお金は、他の機構のために使つても、菩提心を發揮し続けるよう教えた。今回、旦那さんが慈済の善行を目の当たりにして、一緒に善行する、と言った。

王さんは馬鞍山に住んでいるが、そこでも少

め、仕事に行くことを余儀なくされた。王さんは、蔡秀蓮（ツァイ・シウリエン）師姐の手作りした防疫匂い袋をスーパーまで届けたので、彼女は感動し、感謝した。

ある会員は王さんに、自宅隔離している間は世間から孤立したような感じだったが、幸いにも慈済人が毎日気遣ってくれ、王さんが彼女に浄斯本草飲と検査キットを提供してくれたお陰で、病気を乗り切ることができた、と言った。

この津波のように恐ろしいコロナ危機は、人と人とのソーシャルディスタンスを引き離しただけでなく、現状に対して為す術がない感じだった。だが、慈済ボランティアは、感染予防措置をしつかり行った上で、行動でもって奉仕し、無私の愛とケアで互いの距離を近づけたのである。（慈済月刊六六五期より）

「徳運丸」を下船してミャンマーに帰った

かつては船長 今はボランティア

台湾に二年余り滞在した後、やっと故郷のミャンマーに戻った徳運丸の船長は、彼らが困難に陥っていた時、慈済ボランティアが心を寄せてくれたことを忘れはしない。今度は自分が人助けする番だといって、慈善活動から始めた。

一〇一九年十月、ベリーズ籍の「徳運丸」が台湾の台北港に寄港した。

八人の船員は船主から給料の支払いが滞っていたため、船上に残ることにした。それから二年間、給料に関する交渉は引

き延ばされ、各国がコロナ禍で制限し始

めたこともあって、給料を貰えない上に

帰ることもできなくなった。二〇二一年

九月、慈済ボランティアは港湾局の要請を受けて四カ月間にわたる寄り添いケア

を始めた。毎週水曜日に台北港に行き、中国籍とミャンマー籍の船員たちを見舞った。ミャンマー語に精通しているボランティアの蘇金國（スー・ジングオ）さんは、静思語をミャンマー語に翻訳し、證嚴法師のお諭しを一つ一つ話して船員たちの心のわだかまりを解していった。

六人のミャンマー籍の船員は、慈済と政府各省庁の協力の下、今年一月半ばに帰国の途に着いた。私と夫の蔡重吉（ツアイ・ジョンジー）など慈済ヤンゴン支部のボランティアは、六人のいる防疫ホテルのロビーに行き、彼らに果物と我々の気持

●慈済ボランティアがナインナイン・アウン船長（左から2人目）一家を訪れ、彼の母親のドー・マ・マ（左から3人目）さんは慈済ボランティアが心を寄せくれたことに感謝し、ボランティアとサイクロン・ナルギスの災害支援体験を共有した。

（撮影・蔡重吉）



ちを届けた。

それまで会ったことはなかったが、ロビーで手続きをしていた船員は、私たちが「紺と白」のユニフォーム姿で現れたのを見て、喜びの声を上げた。ミヤンマーのコロナ禍は落ち着いてきていた。ホテルのロビーで顔を合わせただけで、それ以上思いやることはできなかったが、彼らの表情から船員たちが台湾のボランティアを思う気持ちが伝わり、とても感動した。そして、身に着けている慈濟ボランティアのユニフォームの大切さをあらためて感じた。

十日間の検疫隔離を終えて、船員たち

彼らにホテルのペンダントを付けてあげると同時に、彼らが将来、どこにいても自分の能力を軽んじてはならず、人助けする人間になるように、と言った。彼らはきっぱりと、絶対に機会を逃さず、人助けすると返事をした。慈濟ボランティアの愛が船員たちの心の中で善の種となって蒔かれた。

二月上旬、私たちはナイン・アウン船長と船員のカン・チュンさんを訪ね、彼らの生活状況を把握した。そしてヤンゴンの実家に戻った後、人に会う度に慈濟の話をして、台湾での慈濟との出会いを話した。彼の母親ドー・マム(Daw

は帰る気持ちがつり、家族も出迎えに来た。彼らは異なった四つの省の出身で、省と省の間は距離があるため、別れ際、船長のナイン・アウンさんは、まるで兄が弟を心配するように、船員と言葉を交わした。二年間船上で一緒に苦を共にした後、別れを惜しむと共に帰郷を喜んだ。

人助けの縁が訪れた

船員たちが台湾を離れる前に、慈濟ボランティアの陳麗雯(チェン・リーウエン)さんたちが最後の訪問ケアを行った時、

Ma Ma)さんは、かねてから人助けに熱心で、二〇〇八年のサイクロン・ナルギス風災の後、彼女は募金をつとめて被災地で米などの食糧を支援した。ナイン・アウンさんも当時、母親と一緒に重被災地だったマヤンゴン地区に行つて物資の配付を手伝った。今は、慈濟ボランティアの実践行為を身に沁み感じて、人助けの心を固くした。縁が訪れたのである。

二月初め、妹の隣人であるテト・ウイン・トウンさんが口腔癌を患って、ケアを必要としていることを知った。ナイン・アウンさんと妹さんは、その人の病状と



家庭環境を理解してから、写真を船員とボランティアが共有するSNSサイトに載せ、皆の支援を期待した。それを受けて、私たちは彼と共にテト・ウイン・トゥン家を訪れた。彼は更に近所に住んでいる主治医を招いて、一緒に相談した。

長年喫煙していたテト・ウイン・トゥンさんは、昨年五月の検査で顔部の病巣が見つかった。ステージⅡとⅢの間だった。主治医はこれ以上引き伸ばしてはいけないと判断し、三日後に入院して腫瘍の摘出手術の段取りをした。

●テト・ウイン・トゥンさん（右）は手術を待っている間、ナイン・アウンさん（左）が付き添った。（撮影・MA Zar Ni Khaing）

テト・ウイン・トゥンさんの唇は既に断裂し、顔は腫れて爛れていた。半年間何度もキモセラピーを受けたため、夫婦の蓄えは底をついていたが、病状はこういうに改善しなかった。手術費のために、奥さんは親戚や友人から金の延べ棒を借りた。ミャンマーは政治情勢が不安定なため、インフレが酷い。二月の時点では時価五百万チャット（約三十五万円）で借りた金の延べ棒は、将来、現物で返さなければならぬ。船員たちにも数十万チャットを募り、皆で力を合わせて貧困と病の苦境に陥っている夫婦を助けようとした。

私たちは先ずテト・ウイン・トゥンさん

に緊急支援金を届けると共に、主治医に慈済の慈善金が各方面から募った愛であることを紹介した。主治医はボランティアから竹筒貯金箱を受け取る一方、テ・ウイン・トゥンさんに「今こそ貴方も良いことをすると誓えば、自ずと善い因縁に恵まれます」と言った。

ホタルが光を放った

船長の妹の家に戻ってから、私たちはどうやってテト・ウイン・トゥンさん一家に寄り添ったらいかを相談した。ナイン・アウン・オングさんとその家族が竹筒貯金箱にお金を入れることを薦めた。

毎日良いことを発願すると共に、愛の心で奉仕するよう他の人を導き、「苦境に直面した時は、先ず自分で努力すれば、慈済も支援を査定してくれます」と教えた。

隣人同士の助け合いの下、船長の妹とその家族、友人たちは募金を集めて、テト・ウイン・トゥンさん一家の生計を助けた。テト・ウイン・トゥンさんは手術を受ける前、彼と同じ血液型の船長夫人も病院に来て献血し、輸血に備えた。私たちは米、食用油、卵などの食料をテト・ウイン・トゥンさん家に届けた。彼の母親は隣に住んでいるので、幼い二人の娘は彼女に預けた。

目からの入院費は一日二万チャットで済むようになった。

慈済もテト・ウイン・トゥンさんの手術費の一部と毎月の生活費そして二人の子供の教育費を補助した。まるで恵みの雨が到来したかのように、夫妻は心中の重荷を下ろすことができ、ナイン・ナイン・アウンさんは慈済の支援に感謝した。

長い間、奔走したナイン・ナイン・アウンさんの喜びようを見て、私は彼が自分で立ち上がった後に人助けしたことを褒め称えた。隣近所で助けを必要としている時、先ず訪問して状況を把握してから心と愛を募り、手術の前後には当事者

ナイン・ナイン・アウンさんは、テト・ウイン・トゥンさんの手術が終わるまで手術室の外で深夜まで待っていた。慈済ミャンマーの同僚も病院に来て彼のケースを立案し、長期支援体制を整えた。私たちはテト・ウイン・トゥンさんが療養期間中に流動食が取れるように、とミキサーを持って行った。彼が体を養って、三週間後の皮膚移植に備えるためである。入院費は一日三万チャット（約二千元）で、テト・ウイン・トゥンさんの奥さんは入院費が払えないことを心配した。ナイン・ナイン・アウンさんが主治医と交渉した結果、病院側のはからいで、六日

家族が必要とする援助の経緯を記録してきたため、大きな効果を発揮できたのである。

「あなたは『無縁大慈、同體大悲』（見知らぬ人に慈しみをかけ、相手の悲しみを我が身として感じる）精神をもって、この家庭の重荷を自ら背負いました。台湾の慈済ボランティアが船員たちに寄り添ったのと同じです。とても感動しました」。ナイン・ナイン・アウンさんは、「私は證嚴法師のお教えに従い、一匹のホタルになって、助けを必要としていた人を助けました。とても嬉しく思います」と謙虚に答えた。（慈済月刊六六五期より）

シンガポールの防疫

配慮の力をプラス

シンガポール社会は「ウイルスと共存」する道を進んでいるが、前例がないため、慎重にならざるを得ない。

慈済の訪問ケアは家庭訪問、電話訪問、オンライン訪問を同時に駆使することによって、行動制限の中で最大限に気遣う力を発揮している。

ケア世帯が感染或いは在宅隔離になった時、

訪問ケアボランティアは彼らと外部を繋ぐ重要な中継役になっていく。

新

型コロナウイルスが変異を続け、二〇二一年末にはオミクロン変異

株が凄まじく勢いを増した。以前は毎月第一日曜日が慈済ボランティアの訪問ケ

アの日だったが、この二年間は政府の防疫措置が調整されるたびに対応し、家庭訪問が全くできない時もあるため、電話やオンライン形式に切り替え、同時に「物

資の宅配」を行なった。特別の状況下では一人から三人までのボランティアが訪問し、医師の診察に付き添っている。

殆どの訪問ケアは一時中止する必要があったが、ケア世帯が孤立無援になるのではなく、慈済は方法をこうして防疫物資を届けたり、寄り添いの連絡をしながら、彼らの代わりに日用品や薬を購入したりして、衛生教育に関する情報を提供し、彼らと外部の重要な中継役を担った。

一人が倒れたら、一家が倒れる

去年の八月、シンガポール政府は大衆に、「新型コロナウイルスとの共存」を呼びかけ、防疫措置を緩めたため、感染

者数は一日に数千人に及んだ。感染拡大が数カ月続き、ケア世帯の中には収入が激減したり、仕事の影響を受けて生活が苦境に陥る家庭が出てきた。慈済は多方面にわたる寄り添い計画を立て、ケア世帯に七百パットの防疫物資を送り、さらに医療ホットラインを開設して医療知識と最新の防疫政策をすばやく届けることで、心身の落ち着きを計った。その他、「感染者のいるケア世帯或いは隔離者を気遣う連絡方法」を始動し、個別のニーズに応じて支援を提供した。

訪問ケアボランティアの梁慧貞（リヤン・フェイツン）さんは去年十月のことを振り返った。政府は自宅療養計画の試行を開始し、ワクチン接種をしている感染者



が自宅で療養できるようにした。如さんから連絡があり、自分と自宅にいる介護師が感染したと伝えてきた。

心配して怖くなったが、如さんから知能障害のある姉は食べ物を呑み込めないで、特殊な食事が必要だが、使い切ってしまったので、途方に暮れている、と聞かされた。姉と中風の母親は、デイケアセンターが感染拡大の影響を受けたことから、家で介護してもらおうしかなく、二番目の姉はコロナ禍で失業してうつ病に罹り、終日家で寝ていると言う。

日用品を購入するために外出することは、彼女らにとって非常に困難で、支援をととても必要としていた。状況が厳し

かったコロナ禍で、梁さんは色々と連絡をとり、程なくボランティアが見つかり、付近で物を購入してもらい、安心祝福バッグも準備した。如さん一家に慰問できるよう願った。

以前の介護師は如さんの家族と頻繁に言い争って離職したので、如さんは仕事を辞めて家族の世話をしなければならなかった。彼女は退職する時、事前に会社に話さなかったので賠償金を請求された。次々に起きる予想外の出来事に彼女はなす術を知らず、耐えられなくなった。

梁さんは、こんな将棋倒しのような不運の例は、ケア世帯の中では多く見られ、「もしも如さんのような家計の大黒柱が

倒れたら、彼女一人だけでなく、家庭が崩壊してしまうのです」と言った。

緊急支援以外に、慈済人は彼らへの補助申請を手伝い、支援が得られる方法を紹介すると共に、ゆつくり彼らの話に耳を傾けて、相手の張り詰めた情緒を解きほぐした。「自分一人でこの問題に對するのではなく、慈済という団体が寄り添っていることを伝えました」。

●訪問ケアボランティアは感染対策を厳守しながら、ケア世帯の日用品購入を代行して玄関先に置くと、すぐそこを離れた。(撮影・戴小慶)

任務がきた！歌を唄おう

ボランティアは自ら安心祝福バッグや防疫物資を届けた。ケア世帯と話し合う僅かな機会だったが、挨拶するだけで、接触を減らすためにすぐ離れなければならなかった。ケア世帯との交流は非常に限られている。

訪問ケアのシニアボランティアである徐雪友（シュー・シユエユウ）さんは、訪問ケアはケア世帯と顔を合わせて、「愛の貯金」を積み重ねることがとても大事だと言う。以前は相手が電話に出なかったり、電話を掛けてこなかった時は何とかして訪問するようにしていた。中でも

インターネット環境のない一人暮らしのお年寄りが最も心配である。「もし『愛の貯金』が充分にあれば、電話訪問でも問題はありません」と説明した。

英さんはベトナムからシンガポールに嫁いできて間もない。彼女は中国語とその文化に疎く、悩んでいることを他人にも言えず、慈済ボランティアの気遣いもあまり受け入れようとしなかった。英さんは故郷を離れて悲しんでいるのだと知って、異国出身者で訪問ケアボランティアの鄒佩君（ゾウ・ペイジュン）さんと姚慧欣（ヤオ・フェイシン）さん、陳玉真（チェン・ユーツン）さんの三人は、これを解決するのは自分たちの役目だと思った。

そして、唄を歌って英さんを慰めようと相談し、陳さんが「音楽は心の悩みを僅かな時間でも暫く忘れ去ることができるとは彼女一人だけでなく、私たちが一緒にいるのですから」と言った。

英さんはその提案を断らなかった。彼女が恥ずかしがるだろうと思って三人は声を張り上げて唄っていると、英さんも小声で皆に合わせて唄うようになり、一曲を唄い終えた頃は皆で満足そうに笑った。

「その日から彼女は自主的に、来月は何時オンラインで会うことができるのか、と尋ねるようになりました」。英さんの変化に、鄒さんは嬉しくなり胸を打た

れた。彼女の心の悩みを聞く以外に生活問題も解決するようになった。

オンライン訪問はよく不安定なネット接続状態で切れたりするが、四人は相手と話したがつたので、何度もネットをつなげて通話した。電話訪問でもオンライン訪問でも、心を込めて付き合えば、困難は解決することができる。科学技術も大事だが、「人」こそが最も重要な支えなのである。

シンガポールには鄒さんのような訪問ケアの主任ボランティアが三百五十人おり、他に百人余りの訪問ケア幹事とチームメンバーが約七百世帯をケアしている。今年から訪問は電話の代わりにオン

ライン方式が主流になっており、多くの人はボランティアの親切を感じ、心の内を話すようになった。

梁さんは、「以前は訪問する時間がとても逼迫していて、多くても三十分で離れなくてはならなかったのですが、オンライン訪問だとどれだけ話しているも構わないのです。中には嬉しさの余り、家の中の様子やおばあさんがご飯を食べている様子を映し出したリ、または誰それが眠ってしまったな

●シンガポールの慈済ボランティアは去年5月初め、ケア世帯の健康状態を調査した。2年間政府が防疫政策を引き締めたり緩和したりする中、ボランティアは、訪問ケアができる時間を大事にした。

どと話します」と言った。

以前のようにお互いの肩を叩いたり、抱き合うことはできなくなりましたが、彼女は、毎月一度に制限されていた訪問よりも、今の方がお互いの関係がより密接になっていると感じている。

コロナ禍はなかなか収束しない。たとえ慈善奉仕に制限があっても、訪問ケアチームは努力を尽くして、ケア世帯に前進する力をもたらしたい。ボランティアが実際に訪問できなくても、優しく話しかけることに注意を払っている。「電話訪問の時、相手の表情が見えないのが一番難しいところです。例えば、悲しみのあまり話しが途切れた時などは、どうして話を続けたらいいのか分からなくなる



のです」。コロナ禍での訪問ケアの仕事はより複雑である。梁さんはたとえオンライン訪問時間の約束が取れなくても、連絡を取り続け、どの家庭にもケアが届くよう尽力している。

訪問ケアボランティアが使命を果たそうとする責任感に證嚴法師に習ったものである。「慈済人は『法師を愛しています』と言いますが、法師は振り返って『私を愛するなら私が愛することを愛するのですよ』と返します。その言葉は私の心の中に深く刻まれており、ケア世帯こそが法師の愛する人なのです。「相手の苦難を取り除かれ、自分で立ち上がれるようになってほしいのです」と梁さんが言った。(慈済月刊六六四期より)



絶えず真理と向き合う

日々、真理と向き合って暮らす――
真理と向き合い、清らかな本性が現れれば、
迷いが智慧に変わる。

◎文・釋徳侃／訳・済運

考え方が老化してはいけない

旧暦一月十五日の元宵節、上人は朝の日課の後、大衆にこう開示しました。

「時間は素早く過ぎ去り、既に新年の一回目の満月が訪れました。私は毎月旧暦の一日と十五日に、時間を大切にしようにと皆さんに言ってきました。分秒は矢の如く過ぎ去り、時間は止めることも

捕まえることもできません。私たちの生命も同じです。色、受、想、行、識という五蘊はとも微々たるものですが、同様に止めることはできず、人は知らず知らずのうちに老いていくのです。体は老いていきますが、考え方が老けてはいけません。いつまでも若々しく保ち、積極的に分秒を使って生命の価値を発揮するのです」。

「時間は人生の中でも最も尊いものであり、時間が因果を引きずり、未来に希望をもたらしてくれず。私たちの希望はどこにあるのでしょうか？修行するならば、清浄無垢になるまで修行し、自分の中にいる仏と同じ本性を示さなければなりません。仏に学ぶならば、迷いを智慧に変え、日常生活で真理と向き合わなければいけません。真理と向き合って、悟りの本性である真如を見つけるのです」。上人は人々に、真剣に時間を使い、福を修めて智慧を増やすべきであり、見せかけの楽しい日々を送って時間を無駄に過ごしてはいけない、と教えました。

教師は庭師の如し

慈済教師懇親会が一九九二年に設立され、数多くの教師が学校で静思語教育を押し進めました。北部の教師は静思語を授業に適した教材にして、各科目の授業に取り入れました。数文字の一句一句は授業の方法を変え、教師と生徒の感情が良くなり、親子関係もそれまで以上に緊密になりました。教師懇親会三十周年に当たって、北部

●静思語教育は教師や大愛ママたちが学校で始めたものである。斗六市溝壩小学校附属幼稚園で、ボランティアと子供たちが静思語の勉強をしていた。

(撮影・張国徽)



教師懇親会は静思語教育の経験と心温まる出来事を募集し、静思語リソースセンターに連絡用のプラットフォームを立ち上げて、静思語の真・善・美を分かち合いました。また、それを教育に携わる人や関心のある人が静思語教育を理解し、運用できるように提供しました。

教師たちの話を聞いた後、上人は、「近頃、私は性急な望みを持っています。それは過去に蒔いた種がちゃんと植えられ、芽を出して、木に育ち、森になったかを気にしているからです。皆で過去にどこに種を蒔いたのか、菩提の苗はどこに植えたのか、振り返ってみてください。教師は庭師のように、種を植えたからには戻ってきて世話をし、水をやって育て続けるべきです。これが責任のある庭師と言えます」。

「今、二、三十年前に教師懇親会に参加したばかりの頃の人々や出来事を、振り返ってみてください。屏東の尤振卿（ヨウ・ツンチン）

先生は静思語教育を始めた時、やんちゃな子供たちを教育して、物分
かりが良く礼儀のある子供に育てました。それからは、全校の先生
たちが静思語を使って生徒たちを指導するようになりました。あの
頃、台湾の各地に彼女のような教師がたくさんいて、皆が心を一つ
にして実践していました。それ故に教師懇親会は大きく成長し、静
思語教育は多くの学校でとても良い成果をあげているのです」。

上人はこう言いました。「あの頃の呼びかけと実践を経て、『静思語』
は多くの言語に翻訳され、静思語教育の教材も各国の慈済人が世界
各地に持ち帰って使い、広めてきました。これらは全て価値のある
ことであり、時間と空間の制限もないため、皆でこの縁を大切にし
なければなりません。過去に集めて整理した教材と関連資料を再度
まとめて編集してから、現代社会の習慣に見合った内容に整理し直
し、古いものを新しい知識に置き換えるのです。古い資料を用いて

歴史の証人になると共に、当事者の話を聞くこともでき、お互いに
生き証人となって、最も価値のある歴史を文章にして書くのです」。

「あなたたちは静思語教育を積極的に推し進めてきましたが、今も
それを必要としています。以前の学生は既に教職に就いており、彼
らの教育状況に関心を持って交流することで、当初、どうやって静
思語教育を発揮して来たのかを振り返ることができます。今でも新
たに以前の方法を用いるのです」。「時代がどのように変化しても、
教育の基本精神は変わらず、教師がどのように心して智慧を使って
教育の良能を発揮するかにかかっています。教育の原則を守れば、
方法はいくらかでも改めたり、変えることができます。慈済の教育理
念と方法はいつまでも受け継がれ、次世代の教師が絶えず良いとこ
ろを吸収しながら、随時改良して、いつまでも質の良い教育を保ち
続けなければなりません」。(慈済月刊六六五期より)

五月の出来事……………

訳・済運

05・04	<p>慈済基金会はポーランドでのウクライナ難民支援で、本日、「ポーランド女性キャン基金会」と慈善活動に関する協力の契約を交わした。双方は共同でウクライナ女性と子供がポーランドで医療やカウンセリング、生活適応能力、教育、安全、衛生、生活環境面へのケアを支援する。</p>
05・06	<p>慈済基金会はポーランドでのウクライナ難民支援で、本日、初めてワルシャワで3回配付活動を行い、一人につき2000ズウォティ（約6万円）のプリペイドカードを配付して合計621人を支援すると共に、「ウクライナ難民を支援する愛の歌・慈済ワルシャワ慈善コンサート」を催した。ウクライナ難民の子供たちとミュージシャンが歌と楽</p>

	<p>器で故郷への想いと平和を望む気持ちを表現した。</p>
05・07	<p>慈済基金会は本日、ポーランド・ポズナン市で2回プリペイドカードの配付活動を行なった。ポーランドに住んでいる台湾人や台湾からの留学生、華僑系学生及び現地のポーランド人たちと被災者雇用を受けた11人のウクライナ人ボランティアなど合計37人がウクライナ難民に同カードを配付した。</p>
05・08	<p>◎慈済56周年「仏誕節、母の日、慈済デー」の3節を合わせた灌仏会は、益々厳しくなるコロナ禍の影響で、花蓮静思精舎と台北臨濟護国寺を主会場にして、大愛テレビとソーシャルメディアを通じてライブ発信する形式で行われた。海外での灌仏会は、それぞれの国のコロナ情勢に沿ってコミュニティで催されたり、ボランティアたちが家からオンラインで参加したりした。世界48の国と地域</p>

05・12	<p>慈済アメリカ総支部は、メリーランド州ボルチモア市で開催された全米災害ボランティア支援団体ネットワーク（NVOAD）の年次総会に参加した。即席飯やエコ毛布、貫通防止靴など「慈悲の科学」技術を使った製品を紹介すると共に、地域の災害救助モデルに関する交流が行われた。</p> <p>ポーランド国内にいるウクライナ難民支援で、慈済基金会は14日と15日、ワルシャワの聖ヨナ・ボスコ教会で難民に対するプリペイドカードとエコ毛布の配付活動を8回行った。その他、ドイツ、オーストリア、オランダの慈済ボランティアがポーランド・ルブリン医科大学の学生及び被災者雇用を受けた難民と合流し、14日はワルシャワ近郊のピアセチノ市レシユノボラ、そして16日からは5日間続けてルブリン・カリタス基金会でウクライナ難民に同カードと毛布を配付した。</p>
05・14	

	<p>の266の地域道場から約14万人が参加した。</p> <p>◎慈済日本支部の灌仏会は、政府のコロナ対策に合わせて2年間行われなかったが、今年では以前のように催された。午前は台湾花蓮の静思精舎とオンラインで繋いで行われ、午後は地域の民衆が参加すると共に、「親孝行活動」が行われた。また、16日は代々木公園でホームレスたちのために灌仏会を行ない、合計252人が仏恩を受けた。</p>
05・09	<p>台湾のコロナ禍は益々厳しくなり、新北市新店区、文山区の慈済ボランティアは本日より台北慈済病院が主に対象としている新店、平溪、双溪、芦洲、貢寮、瑞芳などの地区への支援を始めた。在宅隔離している新型コロナ肺炎の陽性者ケアでは毎日8人が交代で、電話で健康状態を聞くと共に情報を提供している。</p>

05・22	<p>慈済マレーシア支部が運営管理しているタイランポーコミュニティセンターの改装工事が完了し、本日除幕式が行われた。当施設はペナン州政府とペナン島市政府が提供したもので、児童学習塾や多目的ホール及び電子図書館として利用されている。</p>
05・21	<p>慈済基金会は引き続き行われているポーランドのウクライナ難民支援で、本日ポズナン市タルノヴオでプリペイドカードと毛布を配付した。慈済は3月5日にポーランドで1回目の配付活動を行なつてから、5月21日までにルブリン、ポツナン、ワルシャワ、シュチェチンなどで、80回余りの配付活動が行われ、プリペイドカード、エコ毛布、寝袋及び食糧などの物資が2万人余りに提供された。</p>
	<p>の契約を取り交わした。今後、ルーマニア、モルドバにいるウクライナ難民を支援する。</p>

05・15	<p>慈済カナダイースト支部は4月末に続き、神の母のキリスト正教会と協力して、戦争から逃れてきたウクライナ人移民ケアの一環として、本日5世帯にプリペイドカードとエコ毛布などの物資と共に、世帯のニーズに沿って台所用品や買い物キャリア、電気給水ポットなど生活用品を配付した。その中の2世帯は会場に来ることができなかったため、神父が代理で受け取った。</p>
05・16	<p>慈済大学は16日と17日にそれぞれ、ウクライナのマリウポリ州立大学とウクライナカトリック大学とオンラインで協力の覚書を交わした。将来、慈済大学はオンラインで授業と教師や学生との交流、共同研究、学生の短期間研修などを行う。</p>
05・17	<p>慈済基金会はイスラエル国際人道支援フォーラムとオンラインで協力</p>

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈济病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈济大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang
TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈濟

2022年6月17日発行・306号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



「慈済の家」へ食事に来てください

モザンビーク・マプトにある「慈済の家」は、コロナ禍でコミュニティの食事提供を2年余り中止していたが、今年2月半ばに再び提供を始めた。コロナ禍の間、多くの家族が失業し、貧しい高齢者は栄養不足になっていた。現地ボランティアは週1回の炊き出しを行い、3月末までに1900人の高齢者とホームレスに提供した。（モザンビーク・マプト 写真提供・モザンビーク連絡所 2022年3月31日）



慈済日本サイト 慈済ものがたり